

1. オリエンテーション、導入——聖書と聖書学・考古学
- 2～7. 旧約聖書——宗教史的背景、創造、契約、王権、預言、知恵
8. 新約聖書1——新約聖書学
9. 新約聖書2——神の国 6/17
10. 新約聖書3——イエスの譬え 6/24
11. 新約聖書4——富 7/1
12. 新約聖書5——国家 7/8
13. 新約聖書6——グノーシス
14. 受講者による研究発表1 7/15
15. 受講者による研究発表2 7/22
16. フィードバック

<前回>知恵

(1) 成立の歴史的背景

1. 旧約聖書の「知恵文学」：ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉
外典の知恵の書、シラ書（集会の書）
2. 創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状況（王国形成・崩壊からバビロン捕囚、地中海・オリエント世界そしてヘレニズム世界の国際関係）において展開したものと位置付けられる。
3. 知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成 学校の知識人
(1) 共同体の知恵（伝承） (2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵
4. 共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）
因果応報原理の中心的な役割。 cf. 転換的知恵（クロッサン）

(2) ヘブライ的知恵文学の思想的特徴

- ①創造の知恵、あるいは知恵による創造
世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」
- ②神の創造行為の探求と称賛としての科学 → 自然を通じた神の讚美
→ 自然神学（書物としての自然）
- ③「知恵のある生活」
日常的な実践に関わる知恵に置かれている。知恵は共同体において正しく・賢明に生きることを可能にする実践的知恵、世代から世代へと伝承された知恵。共同体の知恵は共同体の集団的な自己同一性の核心に属している。
- ④因果応報とその限界。個人の問題として、そして共同体・民族の問題として。
この因果応報の様々な破れを鋭く描き、因果応報の限界をはっきり見据えている。
「コヘレトの言葉」（「なんとという空しさ、なんとという空しさ、すべては空しい」）
「ヨブ記」は、正しく生きる人間（義人）が不幸になる、という問題（義人の苦難）

(3) ヨブ記

5. 人生の謎（悪・罪・不幸・不条理・無意味・不正義）に対して、宗教は何を語るのか。
謎に直面するときに、宗教の真価が問われる。
6. ヨブ記をどのように読むか。
・散文体での枠組みの位置づけの問題
・文学作品としてのヨブ記 → 思想にとって文学とは何か。
7. 明確な論点とわかれる論点：因果応報の破綻の後の世界。ヨブは納得・了解したのか、救われたのか。
8. ユングのヨブ解釈：「神の変容」のプロセスにおけるヨブ記の意義。
・ヨブの道徳的な優位
・非合理的で暴虐な神から合理性を有する神（神の人間化）へ
悪の問題への対処

8. 新約聖書 1 —— 新約聖書学

(1) 近代的知のモデルとしての自然主義

1. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解、そして聖書研究も、この変動に規定されている。

啓蒙主義→実証主義的科学

村上陽一郎の聖俗革命

村上陽一郎の「聖俗革命」: 「神—世界—人間」→「世界—人間」

2. 「近代科学」の自律化: 一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念 (実証科学としての自然科学) の誕生。近代的知のモデル。

小林道夫: 仮説→実験による検証・修正

3. 代表例としてのラプラス・ラプラスの悪魔 (ラプラス『確率の哲学的試論』、岩波文庫)

4. 注意点: 科学の分野における相違あるいは時差

5. 近接的な作用因による因果律と自然

→ 機械論的自然 cf. 錬金術的自然

日常的経験とのずれ (デカルト)

↓

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

(2) 自然主義と宗教、争点は何か

6. 科学と宗教との対立 (近代的知・自律と伝統的権威・他律) とは、双方に原因がある。

7. そもそも、奇跡とは何か。

パネンベルクの奇跡論

759.1/

the concept of miracle has become one of the more intricate problems, because miracles are said to involve a violation of the laws of nature, as David Hume asserted in the section on miracles in his *Enquiry Concerning Human Understanding* (1748).

The concept of miracle as a violation of natural law subverts the very concept of law and in effect exposes the futility of the assertion of miracles.

760.1/

This was not the meaning of the concept of miracle in Christian theology, however. In the biblical writings, the word *miracle* refers to extraordinary events that function as "signs" of God's sovereign power. " signs and wonders"(Daniel 6:27; John 4:48)

Augustine said, "Whatever is unusual, is a miracle"(*quae sunt rara, ipsa sunt mira; De civ. Dei* 21,8,3). Explicitly he emphasized that events of that type do not occur contrary to the nature of things. To us they may appear contrary, because of our limited knowledge of the "course of nature." But God's point of view is different,.....

. . .

762.2/

The concept of miracle in the Augustinian sense of the term, then, does not involve any opposition to the order of nature described in terms of natural law. It only requires us to admit that we do not know everything about how the processes of nature work. In any event, the awareness of the limitations of our knowledge may keep us from denying on principle the possibility of natural events, even if they are extremely unusual.

that (to deny their possibility on principle) would be a form of dogmatism and not consonant with the empirical attitude of science.

8. John Locke: according to the reason / above / contrary to knowledge / faith 信仰と知との関係、信仰にとっての懐疑の意味(Paul Tillich, *Dynamics of Faith*) 懐疑は信仰の構成要素である。
9. ヒック：自然主義とは何か。→近代の様々な世界観が共有する立場。
自然主義と宗教は論理的には相互に論駁不可能な二つの世界の見方。
→ 宗教的見方にもそれ固有の合理性が認められる。合理性の複数性。
「まずは自然主義の世界観を頭に入れておく必要がある。これは近代の西欧思想の中心にあるもので、仮想の实在というものの可能性を一切認めない考えである。自然主義の世界観は有力な科学者から提出された山のような注釈によって、いまや疑う余地のない仮説と見なされている。」(3)
「根本的な信仰箇条」「科学内部の、つまりは一般社会内部での優勢な無批判的仮説ないしは根底的なパラダイム」(4)

<参考文献>

1. 小林道夫『科学哲学』産業図書。
2. 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社、『科学・哲学・信仰』第三文明社。
3. ブライアン・イーズリー『魔女狩り 対 新哲学』平凡社。
4. ヒック『人はいかにして神と出会うか 宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。
5. パネンベルク (Wolfhart Pannenberg)
"The Concept of Miracle," in: *Zygon*, vol.37.no.3 (September 2002) by the Joint Publication Board of Zygon, pp.759-762.
6. ヒューム『『奇蹟論・迷信論・自殺論 —ヒューム宗教論集 3』法政大学出版局。

(3) 近代的知と歴史主義

1. 自然主義と歴史主義
近代的知の二つの動向 (因果律の二つのタイプ)
作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。
→ 自然科学／精神科学、説明／理解
2. 「近代」と人間的現実の歴史化
現実は無常不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。
↓
近代歴史学、歴史的視点
「「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は、メッサニーが言う「自然」からの「自由」という性格をもっていることに、われわれは注目せねばならない。つまりそれは「自然」から「自由」へという変化、「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程でもある。」(大木、上、47)
「四つの相における近代化」「①工業化、②都市化、③民主化、④情報化」(55-60)、「真理から情報へ、これは、真理の歴史化と言ってよい。真理は無常ではない。」(58)
「近代化の深層構造」「①非魔術化・合理化」「②自由化としての近代化」(60-63)、「「コスモス」から「歴史」へという《歴史化》が、われわれの歴史神学の座となる。」(62)
3. 「歴史主義」の多義性あるいは混乱
歴史主義という用語は、様々な視点から様々な意味を賦与させて使用されている。特に、ポパーとのほかの論者との相違。
「歴史主義」「その悪しき側面から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されねばならない」、「しかし、この歴史主義に対して、自然主義が同様に原理的かつ包括的な仕方に対立している」

(トレルチ、諸問題・上、158)、「自然主義は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則化の連関として、またそのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されなければならない」、「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世にも知られていないものであった」(159)、「近代的思惟一般が持っている二つの本質的動機」(164)。

4. 存在レベルにおける歴史・歴史化 (存在論的概念)

- ・人間存在の歴史性
- ・聖書的な歴史的思惟 (聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味)
聖書的人格主義とギリシャ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。
- ・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

5. 知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関(文脈)の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。

相対性の意識＝歴史相対主義→ニヒリズム

「この時代の激動は、倫理学の崩壊をももたらした」(大木、1)、「相対主義の克服とは、相対主義が文化ニヒリズムへと転落する道とは逆の方向を模索することであり、崩落に身を委ねるのではなく上昇の意志をもつことである」、「今日の知的課題は、倫理学の建設である」、「相対的状况を十分知りながら、なお倫理学が倫理学として必然的に求めるべき普遍的な当為を探究する一つの企てがなされる。」(2)

「自然主義は無制限に、あらゆる生活のものずごい自然主義化と荒涼化へと導き、歴史主義はあの相対主義的懐疑に導く」、「歴史的なものの認識可能性と意味とに対する相対主義的な価値的懐疑であり疑惑である」、「これら悪い副次的な意味」、「歴史的素材を使いこなす文化総合へと向かう勇気をふるい起こす歴史哲学を求めている。」(トレルチ、165)

<参考文献>

1. トレルチ『歴史主義とその諸問題 上中下』(トレルチ著作集4～6)、ヨルダン社。
『歴史主義とその克服』理想社。
2. C・アントーニ『歴史主義』創文社。
3. F. マイネッケ『歴史主義の成立 上下』筑摩書房。
4. K. ホイシー『歴史主義の危機』イザラ書房。
5. K・ポパー『歴史主義の貧困』中央公論社。
6. カール・マンハイム『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣。
7. 田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院。
8. コリンウッド『歴史哲学の本質と目的』未来社。
9. リクール『歴史と物語 I II III』新曜社。
10. E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書。
11. ゲオルク G. イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
12. 大木英夫『新しい共同体の倫理学 基礎論 上下』教文館。
13. 大林浩『アガペーと歴史的な精神』日本基督教団出版局。

14. その他

カール・レーヴィット『歴史の意味』未来社。

ニスベット『歴史とメタファー 社会変化の諸相』紀伊國屋書店。

アルフレート・シュミット『歴史と構造 マルクス主義歴史認識論の諸問題』
法政大学出版局。

ポール・ヴェーヌ『差異の目録 新しい歴史のために』法政大学出版局。

ドミニク・ラカブラ『歴史と批評』平凡社。

アーサー・C・ダント『物語としての歴史 歴史の分析哲学』国文社。

(4) 近代聖書学の諸原理

・パネンベルク

「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

<参考文献>

1. トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集2』ヨルダン社。
2. パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。

(5) 近代聖書学の方法と帰結

1. 歴史的批判的方法：文献学＋歴史学→近代聖書学のパラダイム
 2. 伝承史：イエス→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集
 - ・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判：文学様式と生活の座との対応）
 - ・編集者の意図・神学の解明（編集批判）
 3. 様式批判・編集批判から文学社会学（テキストと社会との相関関係・相互連関）へ。
そして、新しい新約研究の動向＝方法論の拡張・総合化（歴史的批判的方法を超えて）
 4. イエスの奇跡物語（治療奇跡）
聖書学的に奇跡物語をどのように解釈するか
奇跡テキストはいかに読まれるべきか → ふさわしい問いとは
 5. 悪霊に取りつかれたゲラサ人をいやす（マルコ）
- 5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4 これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8 イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。9 そこで、イエ

すが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。10
そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。11
ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。12 汚れた霊どもはイエスに、
「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13 イエスがお許しになったので、
汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖に
なだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。14 豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのこ
とを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。15 彼らはイエスのところに来ると、
レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくな
った。16 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚
のことを人々に語った。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたい
と言いだした。18 イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行き
たいと願った。19 イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。
そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知ら
せなさい。」

6. 新約聖書学の代表的議論から：荒井献

・荒井献の新約聖書学のポイントの一つ

- ・イエスにおける「民衆の視座」（民衆と共にあるイエスの振る舞い）と「相対化
の視座」（神は相対化の視座として機能する）の明確化。「民衆と」「権力に」。
- ・奇跡物語伝承の様式史法則 → 「理念型」の再構成

・奇跡物語の最古層、帰還命令 → 「癒やし」とは何か、その社会的次元

7. ポイント → 医療人類学

- ・疾病 (disease)：身体的、心的。基本的に特定の次元に限定
- 病 (illness)：精神的・宗教的を含む全人格的態度、複数の次元が複合的に関与する
- ・奇跡は物理的現実である前に社会的現実である。奇跡の癒やしは家族への帰還で完成。
癒しの社会的次元：関係性の回復という奇跡
和解のない世界、「にもかかわらず」
驚くべき出来事＝恩恵・贈与

<参考文献>

1. 波平恵美子『医療人類学入門』朝日選書。
2. エドガー・V・マックナイト『様式史とは何か』ヨルダン社。
3. ノーマン・ペリン『編集史とは何か』ヨルダン社。
4. ダニエル・パット『構造主義的聖書釈義と何か』ヨルダン社。
5. 荒井献『問いかけるイエス 福音書をどう読み解くか』NHK出版、1994年。
「第一五講 「自分の家に帰りなさい」－「悪霊に取りつかれたゲラサ人」
のいやし マルコ五・一一二〇」 190-202 頁
『イエスのその時代』（岩波新書 1974年）
6. John Dominic Crossan:
The Historical Jesus. The Life of a Mediterranean Jewish Peasant,
Jesus. A Revolutionary Biography, HarperSanFrancisco, 1995.
(ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』
新教出版社)
7. Marcus J. Borg,
Jesus in Contemporary Scholarship, Trinity Press International, 1994.
Conflict, Holiness and Politics in the Teaching of Jesus, Trinity Press, 1984.